明治学院大学学長
　松原康雄殿

博士学位論文（課程博士）審査報告書

2020 年 2 月 12 日
審査委員長　金沢吉展

下記の博士学位審査請求に関し、専門審査委員会において論文審査および口述試験を行った結果、全員一致で合格と判定致しましたので、ここにご報告致します。

請求者氏名　石田　航
論 文 名　　日本人青年の悲嘆に影響を与える要因の検討――死別体験を青年はどのように経験しているのか――

専門審査委員会
　委員長　金沢吉展　　（心理学部教授）㊞
　委 員　杉山恵理子　（心理学部教授）㊞
　委 員　金城 光　　（心理学部教授）㊞
学外専門審査委員
　委 員　伊藤正哉　　（国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター　認知行動療法センター　研修指導部　研修普及室長）㊞

Ⅰ 審査内容

石田航氏の博士学位申請論文「日本人青年の悲嘆に影響を与える要因の検討――死別体験を青年はどのように経験しているのか――」はＡ４判 92 頁、付録 41 頁から構成される論文である。論文は、概ね標準的な心理学的学術論文の形式に則っており、課程博士学位論文としての体裁が整えられていると判定する。大学院心理学研究科では、本学学位規程ならびに心理学研究科内規に基づき、博士論文専門審査委員会を設置し、博士学位論文の審査を行った。

1. 論文の趣旨

本論文の目的は、本邦の一般青年が経験する死を対象とし、悲嘆が重篤化することを未然に防ぐ方法を検討するため、悲嘆に影響を与える要因とそのプロセスについて明らかにすることである。

2. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第１章　序論
　第１節　悲しむことと死の理解
　第２節　青年が経験する悲嘆
　　1.2.1　青年が経験する死
　　1.2.2　発達的特徴によって高まる青年期の死の不安
　　1.2.3　青年の死への不安と精神的健康
　第３節　悲しむことと、悲嘆の分類
　　1.3.1　対象喪失による悲嘆と、身体的・精神的変化
　　1.3.2　重篤な悲嘆と、身体的・精神的変化
　　1.3.3　急性悲嘆と重篤な悲嘆
　　1.3.4　重篤な悲嘆の診断基準における取り扱い
　第４節　悲嘆と大うつ病性障害の違い
　第５節　悲嘆が重篤な悲嘆へ移行する理論的な解釈について
　第６節　悲嘆研究の研究デザイン
　第７節　悲嘆に影響する諸要因についての横断的研究
　　1.7.1　死因と悲嘆
　　1.7.2　性差と悲嘆
　　1.7.3　続柄と悲嘆
　　1.7.4　あいまいな喪失と悲嘆
　　1.7.5　経済状況と悲嘆
　　1.7.6　生前の故人との関係性と悲嘆
　　1.7.7　パーソナリティと悲嘆
　　1.7.8　コーピングと悲嘆
　　1.7.9　ソーシャルサポートと悲嘆
　第８節　悲嘆に影響する諸要因の関連
　第９節　悲嘆に関する縦断的研究
第２章　本研究の目的と意義
　第１節　本研究の目的
　第２節　本研究の意義
　第３節　倫理的配慮
　第４節　本研究の構成
　第３章　悲嘆に影響を与える要因のひとつである死別後のコーピングに関する研究
　第１節　問題と目的

第 2 節　青年を対象とした死別後のコーピングに関する尺度作成の試み（研究 1（予備調査））
3.2.1　方法
3.2.2　結果
第 3 節　青年を対象とした死別後のコーピングに関する尺度の作成試み（研究 1（本調査））
3.3.1　方法
3.3.2　結果
3.3.3　考察
3.3.4　研究 1 の限界と課題
第 4 章　青年の悲嘆を説明する要因の検討（研究 2）
第 1 節　問題と目的
4.1　方法
4.2　結果
4.3　考察
4.4　研究 2 の限界と課題
第 5 章　死別を経験した青年の悲嘆の心理的プロセスの検討（研究 3）
第 1 節　問題と目的
5.1　方法
5.2　結果
5.3　考察
5.4　研究 3 の限界と課題
第 6 章　総合考察
第 1 節　本研究から示唆された点について
6.1.1　量的分析による青年の悲嘆に影響する要因の検討（研究 2）
6.1.2　青年における悲嘆のプロセスの検討（研究 3）
6.1.3　研究 1、研究 2（量的分析）、研究 3（質的分析）から示唆できることについて
第 2 節　本研究の限界と課題

3. 論文の概要

第 1 章においては、悲嘆に関する国内外の研究を概観した。悲嘆に影響する要因として、瀬藤ら（2005）が論じている 4 要因、すなわち、「死の状況」の要因、「死者との関係性」の要因、「死別者の特性」の要因、「社会的要因」を取り上げることの重要性を指摘した。本邦における重篤な悲嘆に関する研究としては、配偶者を亡くした人々を対象とした研究が多い一方で、祖父母などを喪うことの多い青年期の人々についての研究は乏しいことが示されている。また、研究方法として、これまでの国内における研究は実態調査や事例研究が多い一方で、量的研究や質的研究が少ないことが示された。さらに

量的研究と質的研究を織り交ぜた混合研究は国外においても少なく、本邦においては見られないことが指摘された。

第 2 章において、本研究の目的を明示し、本研究の意義として、第一に、青年期における悲嘆の詳細を検討することにより、現在生じている悲嘆によって苦悩を経験している人々への支援について、示唆を得ることを挙げている。第二に、重篤な悲嘆を未然に防ぐ対応について知見を得られる可能性があるとしている。

第 3 章では、死別後のコーピングに関する尺度作成を行った。まず予備調査によって、死別を経験した人々を対象にしたインタビュー調査を行い、その結果を基に、コーピングに関する項目を抽出し、これらの項目を用いて尺度を作成した。次いで、これらの項目に対する回答について、主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、2 因子 16 項目が抽出され、それぞれ、「故人への接近型コーピング」と「故人への回避型コーピング」と命名した。その後、これらの因子の信頼性・妥当性に関する分析を行った。「故人への接近型コーピング」は、弁別的妥当性として採用した TAC-24 の情動焦点型コーピングと問題焦点型コーピングとの間に有意な相関を示した。また、クロンバックの α 係数の値や再検査法の結果により、信頼性が示された。「故人への回避型コーピング」は、クロンバックの α 係数の値より、信頼性が示された一方で、弁別的妥当性として採用した TAC-24 の情動焦点型コーピングと問題焦点型コーピングとの間に相関がみられなかった。

第 4 章においては、瀬藤ら（2005）が論じている 4 要因が悲嘆にどの程度影響するか検討を行った。分析の結果、「死の状況」の要因、「死者との関係性」の要因、「死別者の特性」の要因、「社会的要因」との間に相関が見られた。重回帰分析の結果、死因として突然死であること、故人との関係性に葛藤が強いこと、死別後に喪失者がソーシャルサポートを知覚できていないこと、故人への接近型コーピング尺度項目に含まれている行動をより多く行うこと、内的統制が高いことが、悲嘆に有意に影響することが示された。

第 5 章では、大切な人と死別した人々を対象に、故人との生前の関係性から死別を経て現在までの心理的なプロセスについて、インタビュー調査によって明らかにすることを試みた。質的分析の結果、4 つの大カテゴリが作成された。関連図の検討を行うと、【生前の故人に関わる】【死別に動揺する】【悲しみに対応する】【現実に折り合いをつける】のプロセスを経ると考えられた。【悲しみに対応する】内ではソーシャルサポートを二地点で求める語りが見られた。

第 6 章において、本研究によって得られた知見を先行研究と比較して論じると共に、臨床実践についての示唆を論じている。また、本研究において作成された尺度の妥当性に関わる問題と今後の研究に対する課題について論じている。

4. 論文の評価

（1）研究テーマの社会的意義

超高齢化社会を迎えている今日、身近な人を喪うことは人々にとって重要な課題であ

る。そのことは青年期の人々にとっても取り組むべき課題であり、これまで本邦において実証的に取り上げられることのなかったテーマである。本論文から得られた知見により、青年期の人々に対する臨床実践ならびに重篤な悲嘆への予防が進むことが期待される。

（2）研究方法の適切さ

悲嘆に対する対応について、尺度を作成し、その尺度を用いて検討を行うという量的研究と、インタビュー調査を用いた質的研究の両者を用いて、悲嘆に関して多側面から分析を行ったことは評価される。悲嘆に関してこれまで国内において行われてきた研究は実態調査や事例研究が多い一方で、量的研究と質的研究を織り交ぜた混合研究は国外においても少なく、本邦においては見られないことが指摘されていることから、研究方法上も重要な貢献と言える。

（3）研究結果の有用性

本テーマに関する研究が本邦においては乏しいことから、得られたデータは重要である。複雑性悲嘆に悩む臨床群の人々ではなく、一般青年を対象としていることから、一般青年が悲嘆をどう受け止めているかについて、今後さらなる分析が可能と考えられる。また、尺度の妥当性の検証、4 要因間の関連、悲嘆得点の高い人々に関する分析など、新たな研究課題が見いだされており、今後の研究の展開が予想される。

（4）本研究の限界と今後の課題

コーピング尺度を作成しているものの、得られた第 2 因子がそれ以後の研究に用いられていない。本研究において得られた新たな知見と考えられるが、本研究において活かされていないのは残念である。また、様々なデモグラフィックデータを得ているにもかかわらず、それらも分析に用いられていない。質的分析においては、分類されたコードの羅列が多く、十分な考察が行われていない。加えて、本研究が扱っている概念が「悲嘆」であるのか、「悲しみ」であるのか、本論文中において一貫していないことも指摘される。図表の作成におけるミスや、誤った記載が一部に見られることも指摘された。

Ⅱ　審査結果

2019 年 8 月 6 日に開催された博士学位申請論文予備審査会において、博士学位申請論文提出手続きを進めることが認められた。2019 年 11 月 30 日に申請者が提出した論文について、2020 年 1 月 27 日に専門審査委員会委員による論文審査、口述試験および質疑応答を行った。その結果、審査委員全員一致により、申請者の論文が博士の学位授与対象論文であると判定した。

2020 年 2 月 12 日に石田氏の博士学位申請論文について、心理学研究科委員会において審査を行った。その結果、申請者の博士学位申請論文に対して全員一致により博士

論文を合格と判定した。